街の特徴と子どもの活動実態に関する研究

1G01J096-1 高野　雄太※
Yudai Takano

都市の生活環境の変化に伴って子どもの「あそび環境」も変化した。それに伴って、様々な専門分野から子どもの「あそび」に注目した研究が行なわれているが、本研究では子どもの「あそび」が多様化・複雑化してきていることに着目し、子どものあそびに限らない活動全体の実態調査を行う。また、子どもの活動は活動空間・性別・学年によって違いが生まれると考えられるが、どの要因がどの程度子どもの活動に影響を与えているのかを調査する。

key words:子ども、環境・空間の違い、活動全体、地域社会

1．研究の背景・目的

少子高齢化に伴い、子育てを家庭だけの問題ではなく地域社会の問題として捉え、教育学・社会学・都市計画学などの様々な専門分野から子どもの「あそび環境」に着目した研究がなされている。

ところで、これまでの子どもの活動に関する研究には初めから子どものあそびに着目した上で、実態把握するものが多かった。しかし、近年子どもたちが普段していることの中に「パソコンに向かっている。」「のんびりする。」「ぶらぶらする。」などの従来あそびには分類されなかったようなことが指摘され、子どもにとってのあそびの意味が多様化してきていることに注目すべきである。

そこで本研究では、あそびだけに留まらない子どもの活動全体に着目し、子どもが「いつ・どこで・誰と・何を」しているのかをアンケート調査から把握し、子どもの活動環境である地域の中での活動空間を中心とした実態把握を第一目的とする。

また、活動環境・活動空間の違いを「街の特徴」として捉え、その特徴によって子どもの活動に違いが生まれるのかを調査し、さらに街の特徴という要因だけではなく、学年・性別などの要因が子どもの活動にどの程度の違いを与えているのかを調査することを第二目的とした。

2．本研究の位置づけ

本研究では近年の子どものあそびが多様化してきていることに注目し、子どもの活動全体に着目していることが一つ目の特徴である。

また、子どもの活動全体に着目している既存研究も中にはあるが、本研究では街の特徴の違い・学年の違い・性別の違いが子どもの活動内容にどの程度の違いを与えるのかについて調査することが二つ目の特徴となる。

3．研究の概要

3－1　調査対象地域の選定

調査対象地域は、東京都世田谷区にある尾山台小学校学区域・玉堤小学校学区域とした。この２つの学区域は環状八号線を境に隣同士であるが、互いに違った特徴を持つことから調査対象地域とした。また、この地域の生活者の意識の中で環状八号線によって尾山台学区域・玉堤学区域の分断がされているように感じられる。

3－2　調査対象地域の特徴

尾山台小学校学区域の特徴は、①交通の便がよく出かけやすいこと、②尾山台商店街を中心に様々な商店があることで買いものがしやすいこと、③自然が少ないこと、④公園などの自由に遊べるオープンスペースが少ないことが挙げられる。

玉堤小学校学区域の特徴は、①多摩川・丸子川・等々力渓谷・神社を有しているため自然に触れやすいこと、②交通の便が悪いために出かけにくいこと、③商店や公共施設が少ないために屋外以外で子どもの活動できる場所が少ないことが挙げられる。

3－3　調査対象者

調査対象は学年によっての活動の違い・男女の活動の違いを実態把握するために各小学校の４・６年生に対してアンケート調査を行った。低学年に対してのアンケート調査は難しいとのアドバイスを頂いたので、低学年に対しての調査を行わなかった

表１．各学校の生徒数

	尾山台小学校				玉堤小学校				合計
	4年生		6年生		4年生		6年生		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
児童数(人)	41	30	32	33	39	37	29	36	277

※理工学部社会環境工学科４年

4．アンケート調査の概要

4－1　目的・方法・内容

子どもの活動実態を把握するため、対象地域である尾山台小学校・玉堤小学校の４年生と６年生の児童、合計２７７名に対してアンケート調査を実施した。調査方法は各小学校へお願いし、アンケート用紙を各クラスの担任の先生から子ども達へ配布していただき、それを子ども達が自宅で１週間かけて宿題のように回答し、またそれを学校へ持って行き担任の先生に回収していただく方法で行なった。

内容は主に実態調査と意識調査の２つに分かれる。実態調査については、子どもが「いつ・どこで・誰と・何を」しているのかの実態把握をするために、調査時間を「学校が終わったあとから夕方までの間」とし、その時間にどこで過ごしたのか・誰と過ごしたのか・何をして過ごしたのか・なぜその場所にいたのか、という質問をした。意識調査については、「ふだん、通ったり遊びに行くところに」好きな場所はあるか・どんな場所があったら良いと思うか、という質問をした。

4－2　実施日

調査実施日は 2004 年 12 月 6 日(月)から 12 月 12 日(日)とした。アンケート用紙は 2004 年 12 月 6 日(月)に配布していただいき、2004 年 12 月 13 日から 12 月 17 日の間に回収していただいた。

5．アンケート調査の結果

5－1　回収率

アンケート調査は全体の 68.2%にあたる 189 人から回答を得た。配布数・有効数などの内訳を表２に示す。なお、玉堤小学校の４年生男子については配布３９名に対して得られた回答が９名(23.1%)と非常に少なかったため単純に比較・検討はできないが、結果としてグラフにして記載する。

表 2. アンケート調査の回収率

	尾山台小学校				玉堤小学校				合計
	4年生		6年生		4年生		6年生		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
配布数(部)	41	30	32	33	39	37	29	36	277
有効数(部)	31	24	24	28	9	20	21	31	189
回収率(%)	75.6%	80.0%	75.0%	84.8%	23.1%	54.1%	72.4%	86.1%	68.2%

5－2　活動場所について

本研究では子どもの活動環境である地域の中での活動空間を中心とした実態把握を目的としているので、まず子ども達は学校が終わってから夕方までの間にどこで過ごしていることが多いのかを把握する。

調査結果全体の活動場所の割合

全体の集計結果を図１に示す。自宅の割合が３９％と最も高く、次いで塾が２０％であった。また習い事すべて(塾・習スポーツ・習その他)を足すと３６％となり、子どもの活動場所の７５％が自宅か習い事で占められていることが分かった。

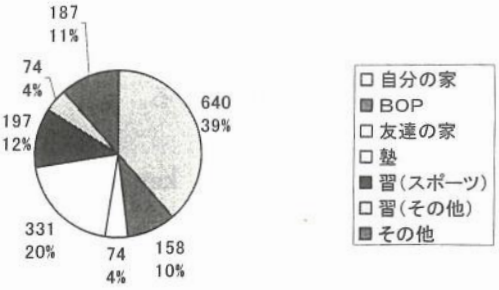

図１．調査対象者全体の活動場所

5－2－1　自宅での活動

図１から子どもの活動場所の中で自宅の割合は 39%と最も多いことが分かった。そこで実際に子ども達が自宅で誰と何をしているのかの結果を集計データから明らかにする。

ここで自宅での活動相手の割合を図２に活動の割合を図３に示す。

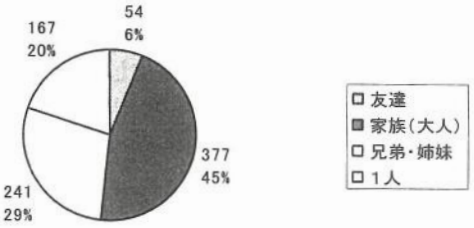

図２．自宅での活動相手

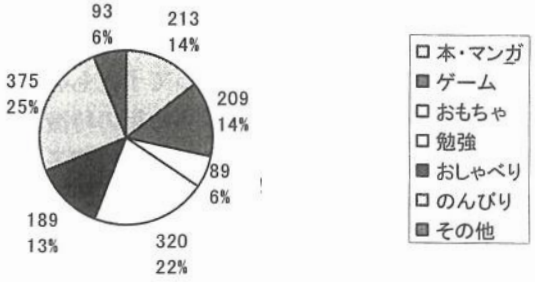

図３．自宅での活動

図２を見ると、自宅では家族と過ごす割合が高いことが分かったが、１人の割合が全体の５分の１にあたる 20%であることも分かった。

また図３を見ると、屋内での遊び(本・マンガとゲームとおもちゃを足したもの)が３８％と高い。のんびりの割合が２５％と高いことから、自宅は子ども達にとってリラックスできる場となっていることが分かる。

5－2－2　BOP(注)での活動

放課後の学校で子ども達が安心して自発的に活動できるために世田谷区の小学校に導入され、今回の調査結果でも活動場所の１０％を占めるBOPでは、子ども達は実際にどのような活動を行っているのかを明らかにする。

まず、BOPでの活動相手については場所が小学校であるので大多数が友達であると考えられ、本調査でも９４％が友達、４％が兄弟、２％が１人であった。

BOPでの活動を図４に示す。

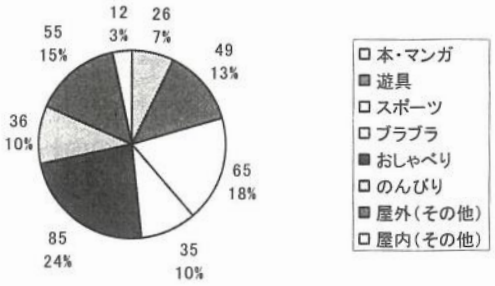

図４．BOPでの活動の割合

図４を見ると、おしゃべりが２４％で最も高かった。次いでスポーツの割合が１８％と屋外(その他)が 15%であったことから、BOPでは屋外活動が多く行われていることが分かった。また、ブラブラやのんびりの割合ががそれぞれ10%であった。

5－2－3　公園での活動

子どもの公園利用率が低くなっていることが指摘されている。本研究のアンケート調査からも公園を利用する割合は全体の1.5%と非常に低かったが、ここでは公園を利用する子ども達が誰と何をしているのかを明らかにする。

表３．公園での活動相手

	だれと				合計
	友達	家族(大人)	兄弟・姉妹	1人	
活動相手の数	22	1	1	1	25

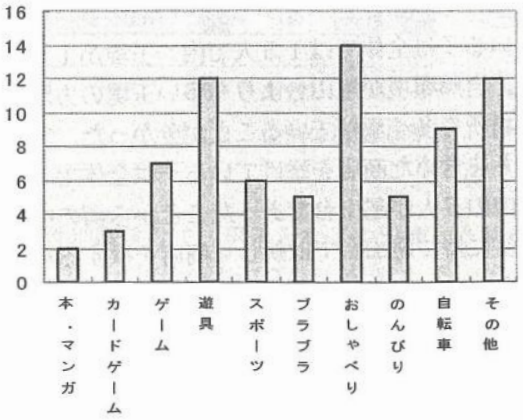

図５．公園での各活動数

表３を見ると、公園での活動相手のほとんどが友達であることが分かる。

図５を見ると、公園での活動はおしゃべりが１４回で最も多く、次いで公園にある遊具が１２回となっている。またゲームなどの屋内でできる遊びを公園で行っていることが分かった。

5－3　活動相手について

本研究では活動空間を中心とした実態把握を目的としているが、活動相手を中心とした実態把握を行うことも重要であると考える。子ども達は学校が終わってから夕方まで間に誰と過ごしているのかを把握する。

調査結果全体の活動相手の割合

全体の集計結果を図６に示す。友達の割合が４３％と最も高く、次いで家族(大人)が２９％であった。また、１人の割合が１０％であったことから１人でいることは少ないことが分かった。

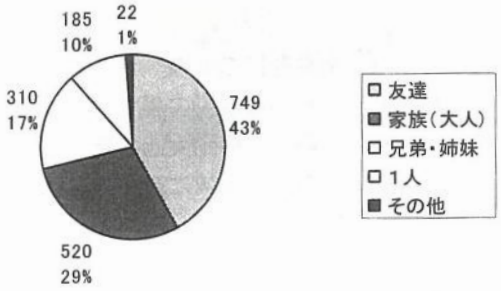

図６．調査結果全体の活動相手

5－3－1　友達との活動

図６から友達の割合が最も高いと分かった。そこで、実際に子ども達が友達とどこで何をして過ごしているのかの結果を集計データから明らかにする。

ここで友達との活動場所の割合を図７に活動の割合を図８に示す。

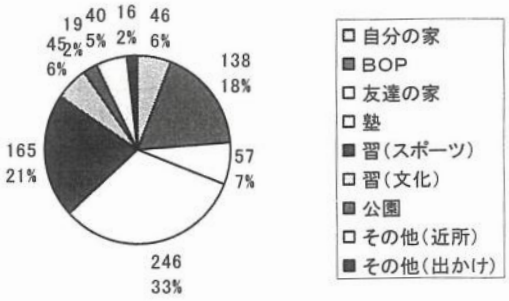

図７．友達との活動場所

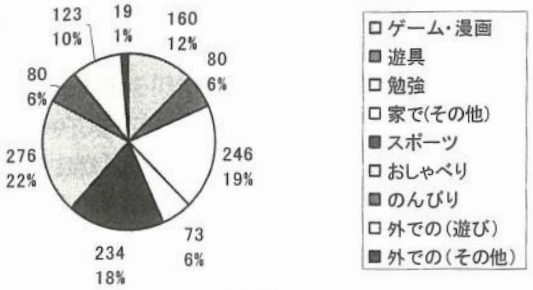

図８．友達との活動

図７を見ると、友達とは塾で過ごす割合が３３％で最も高く、次いで習(スポーツ)が２１％であった。この２つの項目に習(その他)を足すと習い事全体で６０％を占めている。このことから、子ども達が学校が終わったあとに友達と過ごしている場所の６割が習い事であることが分かった。また、ＢＯＰの割合が１８％と高いことが分かった。

また図８を見ると、おしゃべりの割合が２２％と最も高いことが分かった。次いで勉強が１９％、スポーツが１８％となっているが、これは活動場所の結果が反映されたものであると考えられる。

５－４　意識調査について

本研究では子どもの活動の場である地域についての考察を行いたいので、活動実態の調査だけでは不十分だと考え、子ども達の地域に対する意識を調査することを盛り込んだ。

５－４－１　好きな場所

ふだん、通ったり遊びに行くところの中で好きな場所はありますか？という質問について、有効回答人数１８８人に対して得られた回答が全体の１１０人(59%)であった。

ここで好きな場所の打ち分けを図９に示す。

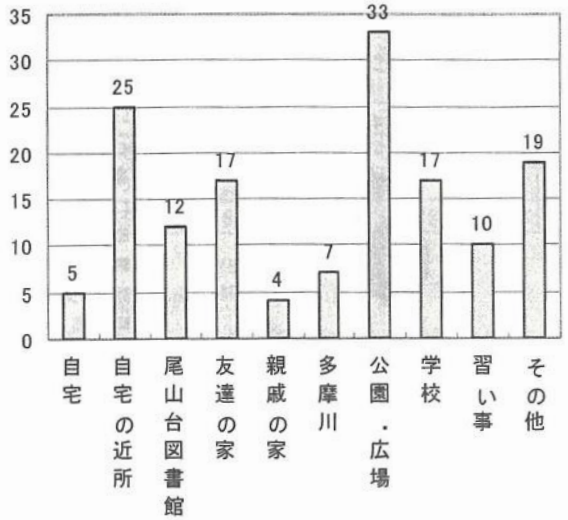

図９．好きな場所

図９を見ると、今回の調査では公園での活動は1.5%と非常に低かったが、子ども達の意識の中では好きな場所として公園・広場が３３人と最も多く挙がっていることが分かった。通学路や駐車場やマンションの階段など、自宅の近所を挙げた子が２５人と２番目に多かった。また、今回のアンケート調査結果では多摩川で活動を行った子は２人しかいなかったが、好きな場所では７人が多摩川を挙げていることが分かった。

５－４－２　あったら良いと思う場所

ふだん、通ったり遊びに行くところの中にあったら良いと思う場所はありますか？という質問について、有効回答人数１８８人に対して得られた回答が全体の９６人(51%)であった。

ここであったら良いと思う場所の内わけを図１０に示す

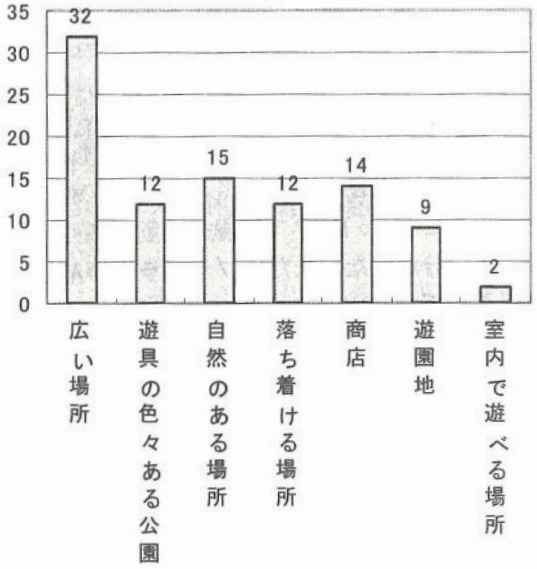

図１０．あったら良いと思う場所

図１０を見ると、広場やグラウンド、野原といった広い場所があったら良いと思っている子は３２人と最も多く、学区域内に多摩川を有している玉堤でも１０人が挙げていることが分かった。自然の多い場所を挙げている子は全体では１５人で内、玉堤が１０人であった。自然環境が尾山台よりも多い玉堤の方が自然のある場所を多く挙げていることが分かった。また、デパートを含めた商店を挙げている子は全体で１４人でその内の５人が尾山台であったことから街の中に商店を豊富に持つ尾山台では新しく商店を欲する声は少ないことが分かった。

５－５．属性による活動の違いについて

本研究では地域・性別・学年の違いがどの程度子どもの活動に影響を与えているのかを調査することを目的としている。

５－５－１ 活動場所

地域別

性別・学年関係なく、ただ地域全体どうしを比較した結果を図１１に示す。玉堤の方が友達の家の割合が３％高く、尾山台は習い事(スポーツ)の割合が３％高かった。それ以外の活動場所は１，２％程度の違いだったので、地域全体を比較すると活動をする場所の割合に違いは生まれないことが分かった。

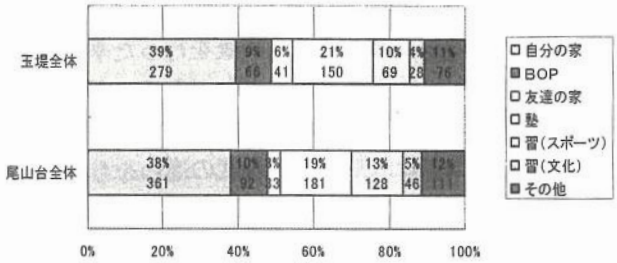

図１１．性別の活動場所

性別

地域・学年関係なく、男子と女子を比較した結果を図１２に示す。男子の方が塾の割合が 4%と習い事(スポーツ)が 11%高く、女子は習い事(文化)が３％高いが、習い事全て(塾と習スポーツと習その他)を足すと男子の方が 13%高く、男子の方が習い事にいる割合が高いことが分かった。また女子はその他が 11%高く、その内容も買い物やお出かけが多いことから活動場所の範囲が広く・様々な場所で過ごしていることが分かった。

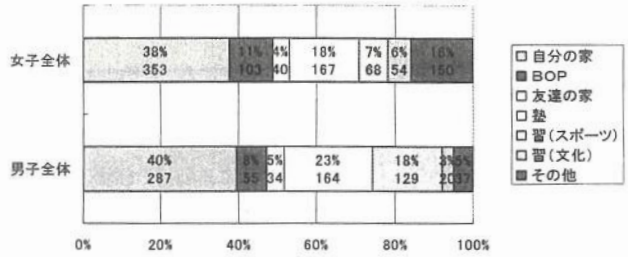

図１２．性別の活動場所

学年別

地域・性別関係なく、男子と女子を比較した結果を図１３に示す。４年生の方がＢＯＰと習(スポーツ)の割合がそれぞれ４％と習(その他)が３％高く、６年生は塾が１０％とその他が４％高かった。６年生になると塾に通う子が増えるため、その分塾以外の習い事や自由に遊べるＢＯＰで過ごす割合が減ることが分かった。また、６年生の方がその他の割合が高いことで６年生になると活動が多様化することが分かった。

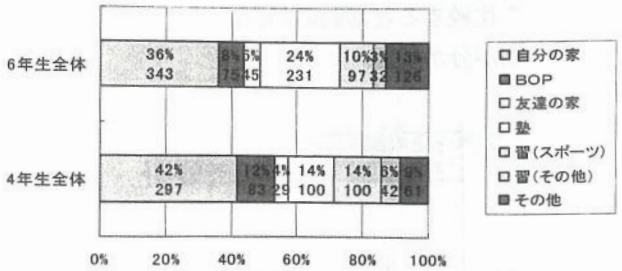

図１３．学年別の活動場所

５－５－２　活動相手

地域別

地域全体どうしを比較した結果を図１４に示す。全ての項目において２％以内の差であることが分かった。地域全体どうしを比較すると活動をする相手の割合に違いは生まれないことが分かった。

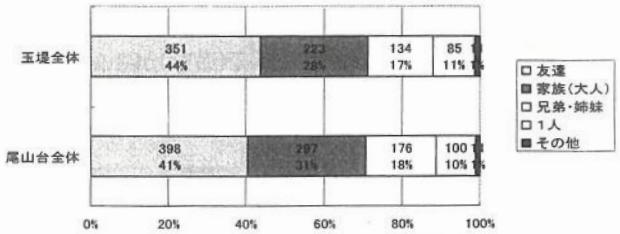

図１４．地域別の活動相手

性別

男子と女子を比較した結果を図１５に示す。男子の方が友達といる割合が８％と１人が３％高く、女子は兄弟・姉妹の割合が８％高いことが分かった。

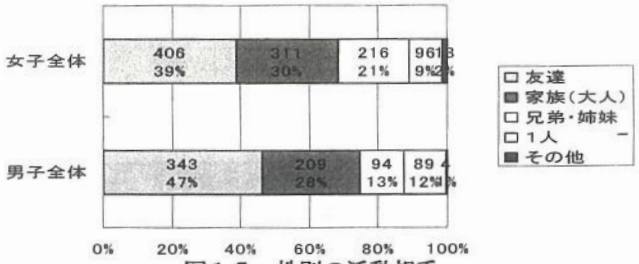

図１５．性別の活動相手

学年別

４年生と６年生を比較すると、４年生の方が家族(大人)と兄弟・姉妹がそれぞれ３％高く、６年生は友達が３％と１人が４％高かった。

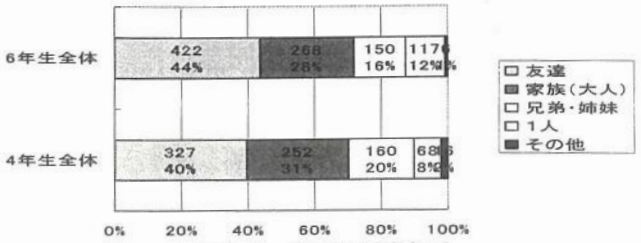

図１６．性別の活動相手

5－5－3　活動

地域別

地域全体どうしを比較した結果を図１７に示す。全ての項目において２％以内の差となった。地域全体どうしを比較すると活動の割合に大きな違いは生まれないことが分かった。

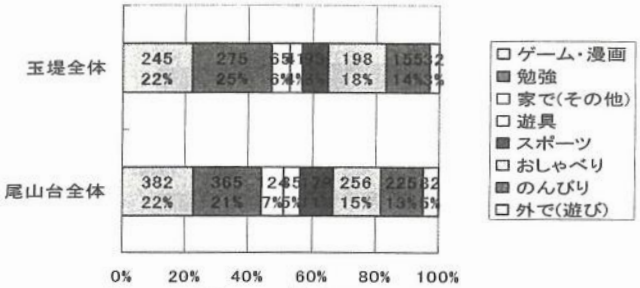

図１７．地域別の活動

性別

男子と女子を比較した結果を図１８に示す。男子の方がゲーム・漫画の割合が１１％と勉強が３％とスポーツが９％高く、女子は家で(その他)が５％とおしゃべりが７％、のんびりが４％、外で(遊び)が３％、外で(その他)が４％が高いことが分かった。

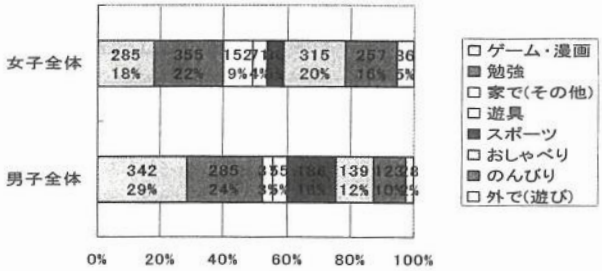

図１８．性別の活動

学年別

４年生と６年生を比較した結果を図１９に示す。４年生の方がゲーム・漫画と遊具の割合がそれぞれ３％高かった。６年生は勉強が７％高かった。４年生がゲームや遊具で遊んでいる分、６年生は勉強していることが分かった。

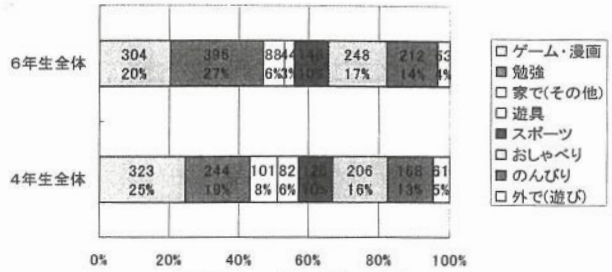

図１９．学年別の活動

６．まとめ

本研究の目的である、子どもの活動環境である地域の中での活動場所を中心とした実態把握を行うために自宅・公園・ＢＯＰにおいて誰と何をしているのかを把握することが出来た。また活動場所を中心とした実態把握だけではなく、子ども達の多様な活動を抽出するために活動相手を中心とした実態把握も行い、友達とどこで何をしているのかについてまとめた。

また、子ども達の街に対する意識を把握するために好きな場所はどこか・どんな場所があったら良いと思うのかについて把握することができ、特にあったら良いと思う場所については遊具施設の充実している公園やスポーツのできるグラウンド、野原が挙がっていた。

本研究では、街の特徴の違いにより子どもの活動場所・活動には違いが生まれると仮定していた。しかし、隣どうしの地域であること、調査を行った季節が屋外活動をしにくい冬であったことなどから、仮定が正しいことは立証できなかった。しかし、性別・学年による違いが子どもの活動にどの程度の違いを与えているかを把握することができた。性別による活動場所の違いは特に習い事と買い物などのその他で生まれ、活動の違いは女子の方がその他に分類されるような個々の特徴のある活動を多くしていることが分かった。学年による活動場所の違いは、塾と塾以外の習い事で生まれ、活動の違いは６年生が勉強に当てている割合を４年生はゲームなどの割合に当てていることが分かった。

【注釈】

注）子ども達の安全を図るため世田谷区が導入している制度のこと。Base Of Playing の略で子ども達が放課後に学校で遊んで帰る際、安心して過ごせるように学校の先生とは違う地域の大人の指導員が子どもの活動をサポートをする。

【参考文献】

1）栗原知子・熊澤栄二：「「子どもの遊び」に見る「生きた環境」の意味に関する研究」：２００２年８月日本建築学会計画系論文集
2）仙田満・岡田英紀：「都市化によるこどものあそび環境の変化に関する研究」：１９９１年度日本都市計画学会学術研究論
3）仙田満・岡田英紀：「こどものあそび環境の構造的変化に関する研究」：１９９３年度日本都市計画学会学術研究論文集
4）市岡綾子：「児童期の地域における遊び環境と帰属意識に関する研究」：２００１年１２月日本建築学会計画系論文集
5）三輪津江・藤岡泰寛・田村明弘：「活動相手別にみた平日および土曜日の子どもの活動空間に関する研究」：２００３年度都市計画学会論文集